

三上參次先生のことども

没後 80 年



三上參次顕彰会

発刊に寄せて

二十数年来、船津公民館では、出前講座として小学校六年生に「校区の史蹟めぐり」を行つてきました。講師は、郷土史研究会(現「ふるさとを学ぶ会」)のメンバーです。

この学習を通して、子ども達は船津の歴史や先人の功績について学び、ふるさと船津に愛着と誇りを持つようになつてきました。

この様な子どもたちの姿を目の当たりにした「ふるさとを学ぶ会」のメンバーが、三上参次顕彰会を立ち上げました。

生まれ故郷のこと生涯忘ることなく、船津・姫路・播磨のために力を尽くされた三上参次先生のことを、もつともっと多くの人に知つてほしい。

こんな思いで活動している三上参次顕彰会に、船津町社会教育協議会では、本年度より補助金を出し、その活動をバックアップしてきました。

この度、三上参次顕彰会が、三上参次先生没後八十年を記念して、「三上参次先生のことども 没後八十年」を発刊しました。

多くの人々がこの小冊子に目を通してください、三上参次先生の人となりに共感し、郷土愛、人間愛にあふれた「おらが自慢のふるさと船津」・「おらが自慢の住みよい町船津」づくりの一助にして下されば幸いです。

平成三十一年一月吉日

船津町社会教育協議会

会長 鯉田 一幸

神童三次 御立村 幸田家に誕生

一 御立村 幸田貞助の三男として誕生



生誕の碑

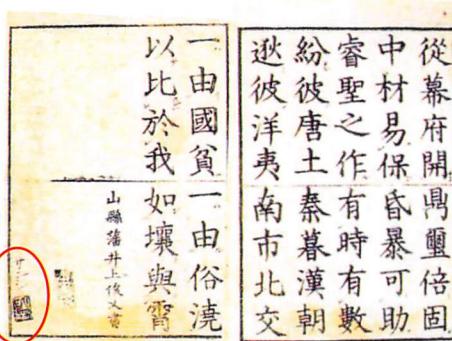


慶応元年 漢方医幸田貞助
の3男として誕生。

寺子屋
前に漢文
が読めた



幼少期の
「サンジ」
幸田の印



幕末の漢学者塩谷容陰（しおのやとういん）が現した日本の歴史書
「大統歌」。幼い字で「サンジ」と生家の幸田の印があり小学校入
学以前からの愛読書であることが判る。

碧雲寺の
寺子屋
神崎郡最古の
寺子屋
・見相祖提
1809～1834
・雲住文惠
1837～1872
三上參次
の学んだ
寺子屋



本堂で椅子というものはなく、昔の低い机で稽古した

三上參次は、慶応元年（一八六五）神東郡御立村の漢方医幸田貞助の三男として生まれた。親が漢方医で、「いろは」は小学校入学以前から親から教えられていた。

歴史書「大統歌」に、生家の苗字「幸田印とサンジ」の記印があり、養子に行く前（小学校入学以前）から漢文が読める神童と言つてもよい利発な子供であった。

幼い頃、御立村の「碧雲寺」にあつた寺子屋に通つた。

この寺子屋は、文化六年（一八〇九）から明治五年（一八七二）の学制発布まで続いた。四書五経・日本外史・仏典にも及んだ。

ここで三上參次は、「いろは」・「国尽し」「名尽し」・「実語教」・「童子教」などを学んだ。

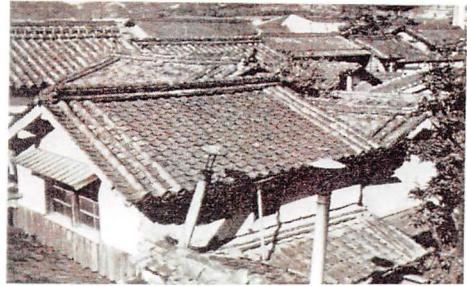
二 幼少の頃 三次は、請われて三上家に

三次 請われて三上家へ

三上家にいった時に、三次を参次にかえた。



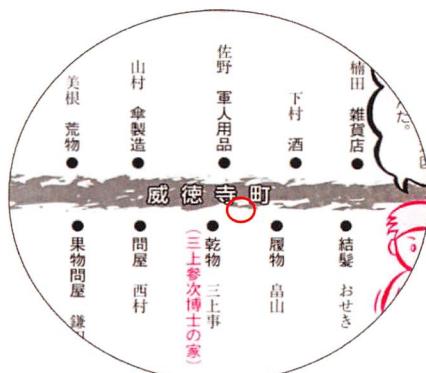
養父 三上勝明
江戸詰藩士・3石2人扶持



三上家旧宅、姫路市野里威徳寺町
8棟の大きな家であった
(文学館編、三上参次)

養父三上勝明は、酒井家の江戸詰めの藩士であったが、廃藩置県後
砥堀村にて寺子屋を開塾し、子弟の訓育に従事していた。しかし、夫
婦は子供に恵まれず、幸田家の3男、三次を養子縁組で迎え入れた。

故郷の家
記念館
・2階建て
・階上階下
共各8帖
1室



三上家のこと

明治18年頃、三上家を妻の兄西村幸七氏に譲渡し、東京に移住。
昭和32年11月、西村氏が参次の旧宅を「記念館」に改装。
昭和35年頃、都市計画で立ち退きとなり、記念館も取り壊された。

幸田家から三上家に

養父勝明は、砥堀村で寺子屋を開いていたことから、碧雲寺での三次の神童ぶりを知り、是非養子にと懇願したのではないか。

明治の初めに、東京大学へと学ばせたのも、さらに支援のために家屋敷をたたんで東京に居を移したのも、単なる養子縁組ではない。

養子にと懇願した授かりものに対する責任を感じていたようと思う。

上京と家との後

参次の上京後も、三上屋の屋号で砂糖、乾物店を生業としてきた。

昭和三十二年十一月、私費四十万円を投じ、家屋の一部を改装して、三上博士を偲ぶ「故郷の家記念館」として開館した。

昭和三十五年頃、記念館が都市計画道路用地として取り壊された。

収集されていた博士の書、軸、手紙、御下賜品等は、文学館で保管展示されている。

養父三上勝明のこと

明治維新後に江戸から姫路に戻り、砥堀村で塾を開き、子どもたちに読み書きを教えていたが、のちに野里威徳寺町で乾物商を営んでいた。

三 小学校から旧制姫路中学（現西高）に

姫路中学の沿革

- 明治 11 年 8 月
姫路市景福寺前町の景福寺を仮校舎として開校
- 明治 16 年 9 月
国府寺町に校舎新築移転。

旧制姫路中学（第 1 期生）

明治 11 年に、飾東、飾西、神東、神西、加西、印南の 6 郡連合町村でできた県下で最初の中学校である。

・ 生徒数

生徒は 1 クラス 16 人くらいであった。

・ 教室

寺の本堂、始終業は太鼓で、お寺の小僧さんになったような気分であった。

・ 教科書

全て原書で、数学もウイルソンの数学書で英書であった。



景福寺

明治 2 年（1869）

「北海道移民扶助規則」
家屋・家具・農具・種子などを支給し、3 年間の食料扶助を給与する。



養父勝明は、明治新政府の国策に沿って北海道移住を考えており、参次を農学部にと考えていた。

四 農学（北海道移住）を目指し上京

農学を目指し上京
養父の希望通り、農学校へ進むため十六歳で上京。

（明治時代の歴史学界三上参次）

教科書

旧制姫路中学校に
砥堀村桃季小学校、模範小学校（現城東小学校）を経て、旧制姫路中学校（現、姫路西高）に入学。

地理、歴史も原書で、語学を学んでいるのか、地理・歴史を学んでいるのか判らなかつた。教科書は、原書で手に入り難く、先生の本を借りて写した。旧制姫路中学校を卒業後、砥堀小学校の代用教員をつとめた。

五 農学から史学へ、東大文学部を目指す

東大文学部へ行きたい

史料編纂事業への道

養父勝明の意向もあり、農学部めざし上京。進文学舎（大学の予備校的な学び舎）に学んでいたが、先生等から「文学の道に進んではどうか」と勧められ、東大文学部へ行きたいと養父に相談した。

（参考は育ててもらった恩を強く感じていた。）



東京大学赤門

養父への手紙

農学を目指し
上京したのです
が、先生の勧めも
あり、私は史学の
道を歩みたいと
思います。
上京時のお父
様との約束事で
もあり、大変心苦
しいのです
が・・・。

東京へ勉学に出
した趣意とは大い
に違う。後に対する
方針も考え方など
ければならないが、
自分もそう思い、先
生もそう言われる
ならば止めはしな
い。その代り成敗共
に十分責任を感じ
てやれ。

（回顧談原文のまま）



養父 三上勝明



史料編纂事業への道

養父との約束は、東大農学部であつた
が自分が学びたかった東大文学部に入
り、さらに東大大学院へと進んだ。

院での研究テーマは「本邦の政治理史、
特に江戸時代について」であった。

参考の研究テーマは、明治政府が力を
入れていた国の歴史をまとめる「修史事
業」に活かされるものとなり、参考は帝
国大学編年史編纂掛編纂助手として、こ
の事業に足を踏み入れることとなつた。

この事業は、時が明治という時代で、旧
來の國粹的な歴史觀と、學問としての科学
的な歴史觀の混在した時代で、事業は困難
を極めた。

しかし、この新しい歴史學を担い發展さ
せたのは、昌平校や和学講談所などでな
い、新生明治國家の教育を受け育つた新し
い年代の歴史学者達で、その一人が三上參
次であった。

明治國家の教育理念を以て育成され、
自身の學問が國を切り開くという、稀に見
る時代を生きた歴史学者三上參次の誕生
である。

六 ライフワークとなる史料編纂と出会う

七 三上参次の最大の功績・史料編纂事業

「国史学の独立」

(文学館 三上参次)

- ① 国史が無かった
 - ② 国史編纂始める
論争起り
事業中止
 - ③ 三上
新方針を
定め再興
- ① 国史の編纂は明治新政府の課題（日本には正史がなかった）
六国史（日本書紀 712 年～901 年の日本三代実録等）以降、朝廷による国史編纂がされず、国史の編纂は新政府の喫緊の課題であった。
- ② 国史編纂を目指す（明治 2 年）
重要視した政府は、国史編纂を内閣直轄事業としてスタートした。
しかし、漢文体の編纂、考証の史料価値等から論争がおこり、編纂に関わっていた東大教授の退職、さらに井上毅文部大臣による編纂委員長の解任（明治 26 年）にまで発展した。
明治 26 年、大日本編纂事業が中止され、後事を新たに設置された東大史料編纂所にゆだねられた。
- ③ 三上等を中心に方針を定め再興す
明治 28 年、三上を中心に、新たな方針「担当者の主觀が、歴史的事実をゆがめることのないよう、史料をそのまま編纂して研究に役立たせる」を定め、史料編纂事業の進むべき道を確立したのである。

担当者の主觀が歴史的事実をゆがめること・・・具体例で教えて



蒙古襲来

鎌倉時代 [1274 年・1281 年] の 2 度にわたるモンゴル帝国の日本侵攻の際に、台風が吹いて蒙古の軍船が多数沈没し日本軍が勝利した。

台風
大風
→神風

元寇の際の「台風」

「尋常小学国史」(大正 9 年刊行)

「大風がにはかに起りて、敵艦多く沈没し」

「尋常小学国史」(昭和 9 年刊行)

「にはかに神風が吹きおこって敵艦の大分は沈没し…」と記述。

元寇の危機をまたま救った台風を、従来の「大風」が「神風」に変更された。神がかり的な皇国史観教育は、大戦末期の神国日本、神風特攻隊となり、なかにはやがて神風が吹き敵艦を全滅さであろうという人まで現れた。

明治新政府が「修史の詔」を発して正史（日本の歴史書）編纂の開始を声明した明治二年は、幕府が結んだ最恵国待遇、裁判権等、不平等条約の改定に乗り出した時でもあった。

歐米諸国は、自國と同等の国内体制、法整備ができていない国を文明国と認めず条約改定交渉は遅々として進まなかつた。日本国の「正史」の有無が文明国の評価に含まれていたかどうかは定かでないが、新政府は不平等条約改定を念頭に置いて「修史の詔」を発したのは間違いない。

三上参次は、明治二十八年に大日本編纂事業を再開するに際し、当時の外山総長に「もはや漢文に頼る時代でない。また二、三の委員のみで記述すれば主觀が混入して史実の客觀性を失う恐れがある。史料を博涉し厳密な吟味をするを主務とすべし」と建言して方針を定め、膨大な「大日本古文書」「大日本史料」に結実し、今日に及んでいる。

不平等条約の改定
明治二七年に領事裁判権、治外法権の撤廃、明治四年に関税自主権の完全回復に成功した。六人の外務大臣と約半世紀の年月をへてようやく諸外国と対等の立場に立てたのである。

八 昭和天皇と三上参次の御進講

昭和天皇御進講

御進講

〔立憲君主としての御教育〕
殿下の教育に重大なる影響を及ぼしたと思はるものの中に、三上参次博士の明治維新の由来に関するご進講があり、同博士はこの中で、一度御親任になりたる内閣の施策には絶対に御従ひくださるべきことを申し上げおり。以下略

(昭和二十一年十一月三十日の元内大臣牧野伸顕の談話の一部抜粋)



三上参次



昭和天皇

陪聴者 12~15 名程度

期間

皇后・皇太子妃・宮家 侍従
武官・女官・木戸等明治元勲

大正 13 年～昭和 7 年
延べ回数 24 回

三上の御進講と昭和天皇

三上の昭和天皇へのご進講は 24 回。そのほとんどが明治天皇の君徳に関するもので、昭和天皇の姿勢に多大の影響を与えた。

昭和 50 年 9 月 6 日の記者会見で、「生涯で最も影響を受けた人物は誰か」という質問が昭和天皇にあった。この時、昭和天皇は「皇室の中から揚げることができるとすれば（三上が話してくれた）祖父明治天皇を挙げます。私は常に祖父の行いを心に留めています」と答えられた。

三上のご進講内容は、残されていない。明治の元勲「牧野日記」に「殿下は御感動ありし様に拝せり・・・思い切った諫言もあり・・・」とあり、ご進講は「人間三上の全てを注いだ訓徳の場であった。

参考「三上参次の進講と昭和天皇」宮内庁書陵部 高橋勝治。

御進講時間割と内容	
ご進講は概ね月曜日	昭和二年（日時不明）時間割
月曜	三上の御進講 午前十時
火曜	行政法（清水澄）
水曜	財政経済（山崎覚次郎）
木曜	三上の臨時御進講 午後二時
金曜	皇室令制（清水澄）
土曜	
日曜	

御進講二十四回の内訳	
昭和天皇に対する君徳培養	（二回）
明治天皇 君徳、慈愛	（九回）
皇居炎上の際の先帝の行動	（二回）
明治天皇と日清戦争	（三回）
明治天皇と大津事件	（二回）
明治維新の功臣	（三回）
信長、秀吉及家康の性格	（二回）
征韓論	（一回）
東京遷都の歴史	（一回）
その他	（一回）

九 叙勲と主たる公職・ことがら

叙勲 勳一等旭日大綬章



戦前の勳一等旭日大綬章は、軍人、議員、役人が主で民間人は少ない。

叙勲者 810 人の内、1 位軍人 60% 強、2 位大臣等の議員 20% 弱、
3 位官僚 14% 弱、因みに教授は 3 人でいずれも旧東京帝大の教授である。



慶應元年 9 月 10 日誕生、昭和 14 年 6 月 7 日逝去、東京都豊島区駒込 5 丁目の染井墓地に葬る（明治時代の歴史学界年表）

大正八年退職してから七十六歳で生涯を閉じるまでの二十年間を明治天皇御紀編纂長・臨時帝室編集官長として、「明治天皇御紀」全二百六十巻の完成に精魂を打ち込み、この偉業を達成。その功績で、昭和九年亥一月「勳一等旭日大綬章」を受章。

十

新聞記事に見る三上参次（新聞記事は社会の評価の一つか）

折々の新聞の見出しを並べると「三上参次」の大きさを改めて感じ

る。

明治から百五十年、この間多くの

偉人が播磨から出ている。しかし、こ

れほど記事に取り上げられ、それも故郷との関連で取り上げられた人はいるのだろうか。

よく言われるのは、福崎町の柳田

国男との比較である。「福崎町と言え

ば柳田国男」と言われるまでになつ

たのは、生家、文学碑、記念館、公園

の河童等いずれも、氏の偉大さを活

かし、地域の人たちが知恵を出し、力を合わせて一つ一つとつくりあげて

きたものである。

三上参次は、故郷・若者・後輩思いであった。「志を持ち上京してくる若者たちの為に「播磨寮」を私費で建立し提供した

世に成功し、財を成した人は数多くある。しかし、故郷の若者の為にこのようなことをした人を私は知らない。



貴族院議員当選

新聞報道

軍部と妥協繩り
直に廣田内閣成る
第四次會見の結果

文相就任辭退

三上参次博士

文相就任辭退

三上参次博士

廣田内閣組閣の号外。文部大臣三上参次の名がある

文相に三上参次氏・文相就任辞退
号外 昭和 11 年 3 月 9 日大阪毎日新聞



「故郷の家記念館」

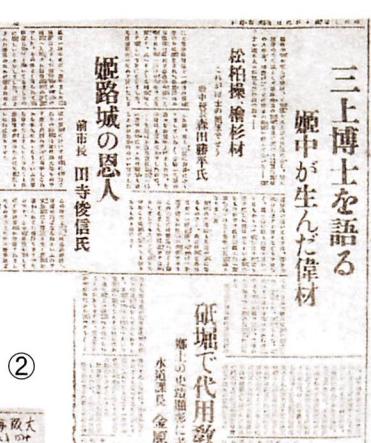
- ・三上参次の旧宅を、養父勝明の妻の兄西村幸七氏が私費を投じ記念館として開館
- 昭和 32 年 11 月 20 日 神戸新聞記事
- ・昭和 32 年頃都市計画道路建設の為立ち退きとなり、記念館も取り壊された。



追悼記事

昭和 14 年 6 月 9 日

- ①中国日日新聞
- ②大阪毎日新聞、
三上の郷土への貢献
は大きかった
姫路文学館三上参次
新聞記事共)



①

②

明治から百五十年、この間多くの偉人が播磨から出ている。しかし、これほど記事に取り上げられ、それも故郷との関連で取り上げられた人はいるのだろうか。

よく言われるのは、福崎町の柳田国男との比較である。「福崎町と言えば柳田国男」と言われるまでになつたのは、生家、文学碑、記念館、公園の河童等いずれも、氏の偉大さを活かし、地域の人たちが知恵を出し、力を合わせて一つ一つとつくりあげてきたものである。

三上参次は、故郷・若者・後輩思いであった。「志を持ち上京してくる若者たちの為に「播磨寮」を私費で建立し提供した

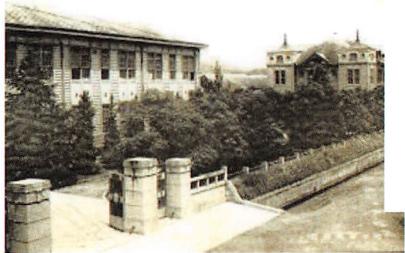
世に成功し、財を成した人は数多くある。しかし、故郷の若者の為にこのようなことをした人を私は知らない。



三上参次と故郷

国宝指定（昭和6年3月）

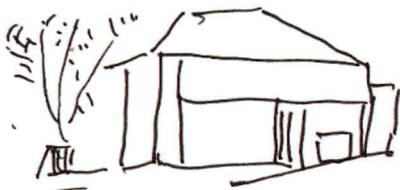
姫路城の国宝指定に当たって、三上参次が史跡名勝天然記念物調査会副会長（後、会長）として尽力し、指定された。



旧制姫路高校（大正12年12月）

旧制姫路高等学校が、旧制広島高校と共に最後に設立。

- ・神戸市、明石市と競った姫路市が誘致に成功。
- ・三上が市民大会で、高校の姫路誘致論を説くと、それまで難航していた寄付がたちまち集まったという。



・播磨寮

場所、規模等詳細不明

・播磨寮と白鷺舎

神戸新聞

播磨寮、白鷺舎

年表、自叙伝、文学館資料

播磨寮のみ

郷里の若者の為に寮建設（昭和3年）

- ・志を持ち上京してきた若者たちの為に、「播磨寮」を私費で建立し提供した。（時には保証人にもなった）。
- ・三上参次は、この寮の建設には特に力を入れていたようで、年表の昭和3年の項に「5月、私財を投じて精力を傾けた播州学生寮が開寮」と記載されている。
- ・昭和32年11月20日付神戸新聞記事
郷土出身の学徒のために、東京に播磨寮、白鷺舎などの建設に自ら巨額の私費を投げるなど、姫路市にとって三上氏は恩人である。

明治十六年、田辺朔郎は東大卒業とともに「琵琶湖疎水」の責任者となつた。
「疎水を利用した日本初の水力発電所」という世界でも類の少ない工事を、大学を卒業したての若者が、社会の負託にこたえ、見事にやり遂げたのである。

明治という時代は、学び、意欲ある若者に、国づくりを託し、若者はそれに応えていった。

この時代を、身をもつて生きてきた三上の究極の故郷への想いが、若者達のための「私費による播州学生寮」の建設となつた。

船津の先人に、このような人をもつたということをとても誇りに思う。

この工事で殉職された人の慰靈碑が、疎水の公園に建てられています。これは田辺が私費で建立し後に市に寄付したもので、明治の技術者の心根を感じます。

青田節頌徳碑碑文

碑文選者 三上参次

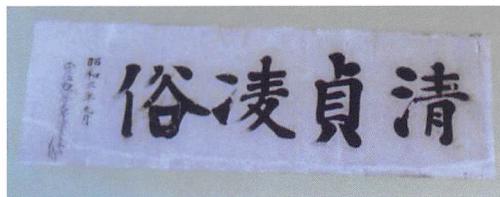
三上参次と船津



宮脇 正八幡神社 扁額



仁色 帰一学館跡地 碑文



船津小学校体育館 扁額



船津小学校校庭(小林清松)碑文 中野大歳神社 玉垣



三上参次は、郷里からの依頼事は快く引き受けている。大きな器の人だったのだろう。当時の村の人々は、現在の私たちが思う以上に三上さんを身近に感じ、故郷の生んだ偉人、学者というよりも自慢の人ではなかつたのかと思う。碑文は2つあり、そのうちの1つが、私財をなげうち若者の教育に生涯をささげた仁色の青田節氏に対するものである。碑文は単なる頼まれ文章でなく、三上氏と相通ずる心から生まれた魂の碑文である。

臨時帝室編修官長東京帝国大学名譽教授
正三位勲一等文学博士 三上参次識す

昭和六年十一月

今年十一月君の門に学びし者追慕の情
に禁へず相謀りて碑を館庭に建て以て師
の恩徳を不朽に伝えんと欲して文を余に
求む余は君と郷を同じくし幼時相識る
の誼あり又深く碑を建てる誠の人の情と
義に感じそして人の道を大切にした君の
教えを湛え人の美を成すを喜び梗概を叙
すと爾云う

なリ一生を郷里の子弟を私財をなげうち
教育にささげた功績は誠に顯著なるもの
あり君は兵庫県神崎郡船津村の人で若
くして志を立て上京し刻苦勉励東西の學
に通ず明治二十三年帰一学館を船津村に
興すや風を慕ひて來り学ぶ者多く声望年
と共に隆し大正十年病を獲て館を閉づる
に至るまで三十有二年其の間薰陶を受け
たる子弟にして社会の各方面に活躍する
者実に一千人を越ゆ

帰一学館の青田節君は心正しく誠の人
なり一生を郷里の子弟を私財をなげうち
教育にささげた功績は誠に顯著なるもの
あり君は兵庫県神崎郡船津村の人で若
くして志を立て上京し刻苦勉励東西の學
に通ず明治二十三年帰一学館を船津村に
興すや風を慕ひて來り学ぶ者多く声望年
と共に隆し大正十年病を獲て館を閉づる
に至るまで三十有二年其の間薰陶を受け
たる子弟にして社会の各方面に活躍する
者実に一千人を越ゆ

十三 「ふなつ」がすき・もつともつと「ふ・な・つ」

三上参次さんを学んで
今からでも遅くない。頑張って三上先生のような人になりたい。

渡し船におどろいた
1年に3万2千人も渡っていたとは。

自慢したい
後藤又兵衛の一族が住んでいた村やと思うと。

もし船津以外に行っても船津のこと忘れない
ええとこいっぱいある船津が大好き。

**船津小学校
6年生の想い**

祖父も知らない船津
船津のこと、おじいちゃんにいっぱい教えてあげたい

船津が好きになった
中学校に行って、もっと勉強したい。

八幡の子芋が食べたい
八幡村の子芋は火山灰の土の畑でできると聞いて驚いた。

八幡村の水の苦労話
昔の人の苦労を聞いて、村が好きになった。大切にしようと思った。

船津ってすごい村やなあ
仁色の青田節先生、御立の三上参次先生のような偉人が居られる。



船津小学校 校区歴史探訪

毎年十月頃、六年生が校区内の歴史文化を現地に訪れ学んでいます。

ここに書き上げたのは、その時の感想文のごく一部です。ほとんどの児童が表現は様々ですが、船津のことを学んで、好きになつた。教えてあげたい、もっと知りたいと、書き残しています。

左上の一番の枠の話です。

今からでも遅くない。頑張って三上先生のような人になりたい。

校区の歴史探訪で三上さんのことを学んだ六年生が、在校生に話した最後の締めくくりの言葉です。

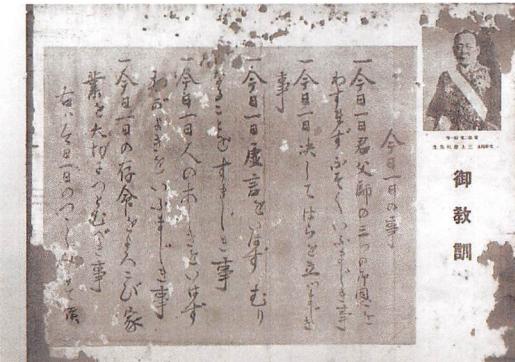
自分たちへの誓いでもあり、同時に卒業に際しての後輩への呼びかけでもあるよううに思いました。

没後八十年、しかし「三上先生は今もこの船津に生きておられる」

まだまだ残っている豊かな自然と人情、積みあげてきた文化と歴史、振り返ってみれば立派な人を数々輩出してきた船津です。大切にしたいと思います。

十四 三上先生は生きておられる・愚直に・真っ直ぐに・ひたすらに

お前の道を進めばよい
愚直に 真っ直ぐに ひたすらに



御 教 訓

今日一日のこと

今日一日君父師の三つの恩を
忘れずふそくをいふまじきこと

今日一日決してはらを立てま
じきこと

今日一日虚言をいはず無理なる
ことをすまじきこと

今日一日ひとのあしきをいはず
わがよきをいふまじきこと

今日一日の存命を喜び家業を大
切につとむべきこと

右は今日一日のつしみのこと

編集後記

校区探訪の児童たちに「三上先生のようになりたい」と大きな力を与えている三上先生は、二〇一九年に、没後八十年を迎えられます。

これを記念して、船津町社会教育協議会のご支援と船津町連合自治会並びに幸田家のご理解のもとにこの冊子をつくりました。

厚く御礼申し上げます。

不備なところ誤りのところもあるかと思いますが、ご寛容ください少しでもお役に立てればこの上ない喜びです。

平成三十一年一月吉日

資料提供と助言、協力をいただいた方々
船津小学校水田校長・御立、西村学氏
天野司氏
編集と助言、協力をいただいた方々

苗村 道弘（船津公民館長）
井上 健・井上 紗代・岡庭昭八郎
小林 庄藏・鯉田紀代子・苗村克三
(故郷を学ぶ会・アイウエオ順・敬称略)

心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

故郷を学ぶ会 福永 強

拾遺

冊子作成のために目を通した資料の内、スペースの関係で記載できなかつたもの、あるいは内容を簡略化したことにより、理解できにくのこととなつたものがあり、より理解を深めてもらう意味で「拾遺」として記載した。

参次の学んだ砥堀小学校

設立 明治六年三月一五日

校名 桃李学校

管理戸長 田尻善八郎

首席教員 三上勝明

学科 読書 習字 算術の三科目

教科書 読書は学問のすすめ・地球の文・究理問答・十二月

帖・世界国尽等・

習字 片仮名・平仮名・十干・十二支・各頭・村名吉凶・

商売往来・農業往来

算術 加法・減法・乗法・

設立当時は、学級の区別なく、ほとんど従来の寺子屋のようであつた。

(砥堀小学校開校百年史から)

三上参次の家庭事情

当時の姫路藩士の実情は、維新によつて上士と言われる人は皆四〇石に減らされて、苦しい生活に追いやられた。三上家は、足軽三両二人扶持を四十石に減らされたが、それほどに困らなかつた。足軽は卒族といつたがのち士族になり、家禄奉還によつて一時金として一〇年分四十八石(米一石約一〇円・銀貨六円強)その他を含めて現金三八〇円を支給された。三上家では姫路威徳寺町で砂糖・乾物商を営み、その収入もあつたので、参次が上京することが十分出来た。

(明治時代の歴史学会)

藩籍奉還と士族諸禄及び扶助費

明治四年の版籍奉還にともない藩は県となり、官選知事が任命され、名実ともに中央集権國家が誕生した。これにともない中央政府が、藩にかわつて禄を全士族に与えることとなつたが、その結果、

士族の禄、扶助金額は、五・二倍、歳出に占める割合は、約五十一・三%という危機的状態となつた。(軍事費は三・三倍、割合は一・二倍であつた。)

廢藩置県前後の歳出構造

明治3年廢藩置県前・明治8年廢藩置県後
史料 大蔵編纂明治前期財政資料集第4巻

	軍事費		諸禄・扶助	
	金額 万円	割合 %	金額 万円	割合 %
明治3年	325	16.9	520	27.1
明治8年	1079	20.4	2,710	51.3

豊富小学校に

当時、姫路から東京に出るのは厄介なことで、人力車で神戸に出て一晩船宿に泊まつて翌日船で横浜に向かつた。横浜から新宿まで汽車で東京に行くのであつた。

子供の一人旅はとうていだめなので、誰か土地の人が東京へ行く時に連れて行つてもらうまで待つことになつた。その間神東郡豊富村の小学校の先生をすることとした。

(明治時代の歴史学会)

予備門の授業

予備門での授業は、總てアメリカの教育の引き継ぎで、英語の教科書ばかりであった。その中ではじめて日本歴史が週一時間設けられ、教科書に新井白石の「読史余論」が使われた。この日本史の授業は、日本の官立高等学校において初めてである。その他学科の中では、数学で非常に苦しんだ。

あまりむずかしいので、試験のときは数学を暗記して受けた。後で聞いてみると、この数学は哲学と数学の交差点まで論じてあるものだつた。

(明治時代の歴史学会)

公けの仕事に携わつてゐる間は自分一個の著述は慎む

編纂事業以外は、一切しないし研究著述もしない。大学の講義と史料編纂掛の事業にばかり没頭することとなつた。

「公の仕事に携わつてゐる間は、自分一個の著述は慎もう。史料編纂の事業に携わつておりながら、自分の研究をすると、ついその方に深入りしてはいけないと想い、一切の著述は見合わすことにして進んできた。それが引き続いて史料編纂掛が史料編纂所となつて現在のとおり盛大なものになつてゐる。」

(明治時代の歴史学会)

保証人のこと

故郷の者で、東京の商船学校の生徒で在学中に学校から四百七十五円借りておつた。その返済方を保証人になつてくれと頼ま

三上参次の編纂事業の方針

明治二十八年の編纂事業再開に際し、三上は東大総長に編纂方針を具申した。

れ、後に陸軍大臣になつた石本新六とで保証人になつたことがありました。この時は、なぜ保証人になつたのか訳がわからなかつた。

保証人については、こんなこともあつた。同国人でありますが、法科の生徒の保証人になつておつた。

ところが、この学生が三年目に不品行があつて退学を命ぜられた。そうすると、これも貸費生で五百円ばかり返さなければならぬことになり、弁償しなければならないようなことがあつた。

(明治時代の歴史学会)

東大総長の訓辞

「これまでの国史編年史を止めて、今度は専ら史料の編纂に主義を変えたことと、今度は史料の編纂であるから、真偽の取捨は勿論のこと、好む好まぬによつて、みだりに一個の見識を加えて史料を取捨してはいかぬ。歴史の材料としては、これまでと違つて政治上の出来事のみならず、社会の各方面に亘る材料を収集しなければならぬ。」

大日本史料・大日本古文書の出版版

明治三十三年、今まで収集した史料を「大日本史料」「大日本古文書」として出版することとした。

「いかに金をかけて集めたものでも、万一のことがあると鳥有^{うゆう}に帰してしまう。それだから、少なくとも一部は複本を取つて置かなくてはならぬ。それには何十万という金がかかるから、それよりも、毎年少しづつでも出版する方がよいじゃないか」こうして出版にかかった。

(明治時代の歴史学会)

〔註〕「大日本史料」とは六国史(日本書紀・続日本紀)、日本後紀・続日本後紀、日本文德天皇実録、日本三大実録(以後の編年体史料集をいう)。

国史学の独立と評価

三上参次の業績の一つに「国史学」の独立がある。従来の日本史は、国学乃至漢学の中の一分野としての存在であつて、また倫理・道徳の規範を示すためのものであつた。

それを、日本史として独立させて、客観的・合理的な方法によつて究明を進める近代科学にまで高めた。(以下一部略)

この功績は、我が国における学問の歴史の上に一大足跡を印せられたものであり、その栄誉は長く後世に伝へらるべきであると信ずる」(日本歴史学会長高柳光寿)

(全文は船津町史、五三八頁～五三九頁)

三上の講義

：先生が、しばしば教室の硝子窓を全部密閉せしめて講義をなされたことを記憶してゐる同學諸君は少なくないであらう。

それは、要するに學術性と教學性との矛盾撞着を感じられた場合の處置であった。

三上は、社会的影響を考慮して公言できない史実も、學術の殿堂に学ぶ者たちには教授しなければならないと考えていた。

窓を開めさせたのは、教室以外ではこれを語るべきではないと学生に示唆するためであつた。

(「三上参次」姫路文学館)

三上参次の修史にかける熱意

修史にかける熱意は、晩年の明治天皇御紀編纂まで衰えること

はなかつた。個人としての著作も、文部大臣の椅子も、三上にとつては志を阻むものでしかなかつた。自己に厳しく人には優しい人であつた。「慈父」と教え子はいう。

(「三上参次」文学館)

「三上参次の大津事件の進講内容は全て口述でよくわからなが、三上はおそらくこの大津事件の明治天皇の迅速な行動のことをご進講したのである」

(「内「三上参次の進講と昭和天皇」）

心血を注いだ明治天皇御紀

もう少しで明治天皇紀公刊本が脱稿という時期に（昭和十二年）大病を患い、一時危篤状態になつた。入院中は「明治天皇御記」の仕事についてたびたびうわごとを言い、医師にもう二年間命を保証してくれるよう頼んだといふ。

(文学館 三上参次年表)

ご進講「大津事件」で明治天皇がとられた行動

明治二十四年五月十一日、大津市で、来日していたロシア帝国の皇太子ニコライに対し、警備に当たつていた巡査、津田三蔵が突如斬りかかり、皇太子が負傷したという事件。

この事件は、ロシアの宣戦布告、多額の賠償金、領土の割譲、租借等を要求されなかど、国内はパニック状態となり政府内にも動搖がひろがつた。報告を受けられた天皇は皇太子が京都にされると知り、即座に側近の反対を押し切り京都に向かわれ、直接お詫びされた。

この天皇の即座な行動が問題を政局化にせず、好転していくきっかけとなつたとされる。

中野地区大歳神社玉垣寄贈

中野地区大歳神社が大正十一年に玉垣を新調して立てた。その時、三上参次は大歳神社とは氏子でもなく、何の係わりもなかつたと思われるが、神社の世話人か地区住民の誰かがお願いに行つたのであろう。その願いに応えて玉垣を寄贈している。故郷の人の願いをよく汲み、故郷をよく愛した一つの現れであろう。

(船津町史)

書の寄贈

正八幡神社社務所に「先祭後政」(祭りを先に政治を後にする)との横額墨書を寄贈している。三上参次は、故郷船津より頼まれれば、何時も快く依頼に応じていた。

(船津町史)

文部大臣を辞退

何といつても参次らしい気迫を見せたのは、昭和十一年（一九三六）の広田内閣組閣の時であった。

陸軍将校による二、二六事件の後を受けた広田弘毅は、貴族院

議員であった三上参次に文部大臣として入閣するよう要請した。新聞の号外には「文相 三上」の文字がおどつたが、参次は「編纂事業をしている時だから」ときっぱりと断つた。

当時の朝日新聞は「天声人語」で、「文政首脳として申し分なく、辞退は惜しむに足る」と書いた。

「大臣になりたい」現代の人たちに聞かせたいような話である。

(姫路文学散歩)

御教訓のこと

三上参次が亡くなつた後、高弟であった歴史学者中村孝也は参次の書斎の欄間から小さい額をみつけた。

「今日一日の事」と自筆で書かれた座右銘であった。弟子たちもほとんど知らなかつたもので、日夜これを見て修養したといわれ、参次のゆかしい心構えが偲ばれる。

中村はこれを写真に撮つて自分の書斎に掲げ、「先生の心を以て心にしよう」と努めたと後に語つている。

(姫路文学散歩)

生誕の處の碑建立

現在の船津村御立は、まだ昔の面影を残している。

近くに播但自動車道が走り、道路が良くなつて少し騒がしくなつたが、周辺には田園地帯が広がつて美しい村である。

集落中央の高台に参次の生家である幸田家があり、その庭先に「三上参次先生誕生之虎」の石碑が立つてゐる。参次の徳を慕つ

た土地の人々や郷土の学者鎌谷木三次が碑の建立を計画したが、参次は断り続けていたという。

そんな折、参次が亡くなつたとの知らせが入り、「ふるさとの誇りを永久に」と昭和十四年(一九三九)七月四日の命日に除幕した。

(姫路文学散歩)

(注)
除幕が昭和十四年七月四日かどうかは定かでない。

叙勲は昭和九年一月、逝去は昭和十四年六月七日、三上参次懐旧談の年表(二四八頁)には昭和十四年七月「この碑竣工除幕とあり、鎌谷木三次氏によれば(本書二十二頁参照)昭和九年九月一〇日建立とある。

三上参次 故郷の家記念館と西村家

昭和三十二年(一九五七)十一月、かつて三上参次が住んだ威徳寺町の西村家に「三上参次故郷の家記念館」が完成、市民に披露された。

姫路が生んだ大学者が忘れられていくのを惜しんで、参次がよく勉強したという中蔵を改造、多くの遺品や写真を集めて開館したもので、当時の新聞には大々的に報じられた。

故郷の家の碑や木彫りの額も造られ、ユニークな館として評判を呼び、研究者らもしばしば訪れていた。しかし、昭和四十六年頃、家屋の老朽化とともに改築され、記念館も姿を消した。

この西村家は参次の養母の里方になる。江戸時代から竹田町で

屑物（雑貨）間屋を営み、田野幸の屋号で手広い商売をしていた。御城出入りの御用商人でもあつたので、藩士たちとも知り合いが多く、主人西村幸七の妹「もと」が三上勝明に嫁入りしたという。この夫婦が参次の養父母になるわけである。

（記念館の閉館理由は、昭和三十五年頃、道路拡幅の為に立ち退きを余儀なくされた。とする説が有力である。）（筆者挿入）

（姫路文学散歩・三上参次先生のことども）

姫路城の国宝指定について

姫路城の国宝指定に尽力したといわれている。このこともあって、姫路城は昭和六年にそのほとんどが国宝に指定された。この祝賀会には参次も東京から馳せ参じ、経過報告の講演会を開いたという。

さらに昭和十一年、史蹟名勝天然記念物調査会会长になつてからは、全国の史跡の保存とともに姫路城の修復に心を碎いた

（姫路文学散歩）

旧制姫路高校の設立

参次ほど故郷のすべてを愛した人はいない。

そのうちの一つに、旧制姫路高校（現神戸大学）の設立がある。

大正七年（一九一八）の高等学校令によつて、兵庫県に内地で最

後の国立高校を設立することになり、姫路をはじめ神戸、明石が候補地になつた。姫路は町を挙げて誘致に取り組んだが、当時、高校設立にあたつては四十万円を寄付しなければならなかつた。

ふるさとの遺墨

参次の足跡を訪ねて姫路周辺を歩いてみると、今でも多くの遺墨に接することができるるのである。

県立姫路西高校にある「崇徳広業」の額、姫路東高校にある「檜杉之材」「松柏之操」の額、この言葉は県女跡記念碑として東光中学校の前に立つている

書写東坂の入口には「後醍醐天皇・花山天皇駐封之虎」、そうめん滝の「砂防竣工記念」、但馬、生野町の「浅田貞次郎翁像」（播但鉄道開設の功労者）、揖保川町正条の「明治天皇御駐禁跡」など数限りない。その一つづつに、参次の深い郷土への愛が込められているのである

（姫路文学散歩）

（姫路文学散歩）

兵庫県と県下各所から各十万円、姫路市は二十万円が必要であった。ところが、姫路の寄付集めは難航した。参次は翌八年に開かれた市民大会に出席、「地域にとつて高校の誘致は絶対に必要だ」と熱っぽく説いた。これをきっかけに、寄付金はあつという間に集まつたといわれる。その後も、参次は文部省と十数回に及ぶ交渉を重ね、昭和十二（一九一七）年十二月に待望の姫路高等学校（旧制）が開校した。

三上参次の旧宅について、ご教示、協力いただき、資料迄提供いただいた「野里町づくりの会」瀬沢会長および関係者の皆様に感謝いたします。

謝恩

冒頭の「発刊によせて」に記されている小学校六年生の「校区の史跡めぐり」は、船津町史を書かれた故藤井寿氏、郷土史研究会の主宰であった故小林光郎氏、先年迄活動をさせていた前館長の中村正剛各氏並びに船津小学校の歴代の校長先生の並々ならぬ故郷への思いから始めたものです。

発刊に際しこのことを記し、今後もこの「校区の史跡めぐり」が引き継がれ継続されることを願い先人への謝恩といたします。

平成三十一年一月

ふるさとを学ぶ会 福永強

参考、引用文献

- (1) 東京大学史料編纂所 東京大学史料編纂所ホームページ
- (2) 埼保己一の生涯 花井泰子 紀伊国屋書店
- (3) 明治時代の歴史学界 三上参次 吉川弘文館
- (4) 江戸時代史 三上参次 講談社学術文庫
- (5) 姫路文学散歩（故郷を愛した人）姫路文学研究会編・姫路文庫 杉原高嶺ほか共著 有斐閣
- (6) 現代国際法講義 河上正二 日本評論社
- (7) 歴史の中の民法
- (8) 二十世紀の中の歴史家たち 今谷明他共著 刀水書房
- (9) あの日の子供達 姫路文学館

10)播磨の風土と文化

- (11)三上参次 姫路文学館
(12)三上参次の業績と人となり 甲斐史子 姫路文学館
(13)野里商店街の絵地図 野里町づくりの会

論文

- (14)三上参次の進講と昭和天皇 高橋勝浩
- (15)明治聖徳記念学会紀要（復刊第十五号） 坂口 修
- (16)歴史研究における「近代の成立」 兵藤裕巳
成城大学大学院文学研究科「紀要」成城国文学論集「第二十五輯」
- (17)大蔵省編纂「明治前期財政経済史料集成第四卷」改造社
- (18)三上参次 我が住まへる番地の歴史「歴史地理第十一巻」

西村氏の手書きのメモ（貸出禁止ですが姫路の図書館に有ります。）

- (19)三上参次先生のことども（三上家と西村家）西村幸七記

町史

- (20)船津町史 藤井 寿

引用・転写

- ・二頁、「大統歌」は参考文献(1)からの転写・五頁、六頁「史料編纂事業（への道）」は同(1)からの一部引用、
- ・三頁の三上家の旧宅、養父の写真、九頁の「新聞報道」の新聞は文学館発行の「三上参次」(1)から転写しました。

三上参次・年表

年齢	個人史	作品	年齢	個人史	作品
1865 慶應元年	9月10日、播磨国神東郡御立村(現・姫路市船津町御立)に漢方医幸田貞助の三男として生まれる。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1908 明治41年	8月、帝国学士院会員となる。	●「外山正一先生小傳」
1870 明治3年	このころ、三上勝明・もと夫妻の養子となる。養父勝明は元姫路藩士で江戸小石川の酒井家藩邸につたが、維新後は姫路に戻り砥堀で寺子屋を営んでいた。	●「栗山先生の面影」共著	1911 明治44年	5月、維新史料編纂会委員となる。	●「社寺領性質の研究」共著
1873 明治6年	養父が校長をつとめる砥堀村桃李学校に入学。その後、姫路県立模範小学校に学ぶ。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1921 大正10年	9月、帝国大学文学部長となる。	●「明治天皇御紀」公刊本十三冊(昭和43年3月)
1877 明治10年	養父は、やがて野里成徳寺町で乾物商を始める。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1924 大正13年	5月、臨時帝室編修官長となり、「明治天皇御紀」の編修に当たる。「引退したら自分の著述を整理したい」という願いは持ちこされた。	●「明治天皇御紀」公刊本二百六十卷編
1878 明治11年	7月、姫路・景福寺の公立姫路中学校卒業。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1926 大正15年	6月、私財を投じて精力を傾けた播州学生寮が開寮。	●「明治天皇御紀」公刊本二百六十卷編
1880 明治13年	科へ進む際、全科目の進級試験を学校制が課したことに対し、生徒代表として交渉、憤慨して退学届を叩きつけたという。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1928 昭和3年	1月、姫路城の國宝指定が実現。ここにも三上の功勞があつた。	●「明治天皇御紀」公刊本二百六十卷編
1881 明治14年	豊泉小学校(旧称桃李学校)の代用教員となる。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1931 昭和6年	6月、貴族院議員となる。	●「明治天皇御紀」公刊本二百六十卷編
1885 明治18年	2月、養父の希望通り農学校に進むつもりで上京。進学金に学ぶ。このころ「雑才新誌」に「北海道經營論」を投稿。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1933 昭和7年	7月、公刊明治天皇御紀編纂長となる。	●「明治天皇御紀」公刊本二百六十卷編
1889 明治22年	9月、東京大学予備門に入学。寄宿舎に入る。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1933 昭和7年	3月、広田内閣組閣にあたり文部大臣就任要請を辞退。	●「明治天皇御紀」公刊本二百六十卷編
1890 明治23年	7月、予備門を卒業。東京大学文学部に入学。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1934 昭和8年	10月、國宝保存会委員となる。	●「明治天皇御紀」公刊本二百六十卷編
1892 明治25年	田辺はる子と結婚。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1934 昭和9年	1月、公刊明治天皇御紀編纂長となる。	●「明治天皇御紀」公刊本二百六十卷編
1895 明治28年	7月、帝國大學文科大學和文学科卒業。大學院に入り、「本邦の政治理史」特に江戸時代に就いてを研究。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1936 昭和10年	10月、公刊明治天皇御紀編纂長となる。	●「明治天皇御紀」公刊本二百六十卷編
1899 明治32年	女子高等師範学校現・お茶の水女子大学教授、兼任東京大学文科大学助教授となる。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1937 昭和11年	11月、史蹟名勝天然記念物調査会会長となる。	●「明治天皇御紀」公刊本二百六十卷編
1901 明治34年	4月、史料編纂掛の設置に伴い史料編纂委員となる。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1937 昭和12年	大病を患い、一時危篤状態となる。	●「明治天皇御紀」公刊本二百六十卷編
	1月、東京大学文科大学教授に昇任、史料編纂掛主任となる。	●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1939 昭和13年	入院中は、「明治天皇御紀」の仕事についてたびたびうわ言を言い、医師にもう2年間命を保証してくれるよう頼んだという。	●「明治天皇御紀」公刊本二百六十卷編
		●「大日本史料」「大日本古文書」の刊行がはじまる。	1939 昭和14年	6月7日、逝去。73歳。遺族や門下の辻善之助、中村孝也らが、次々と講義録をまとめあげた。	●「明治天皇御紀」公刊本二百六十卷編

文学館発行 三上参次

「三上參次先生誕生の處」の碑

(右側面) 昭和九年九月十日建之

(正面) 三上參次先生誕生之處

(左側面) 鎌谷木三次造之

碑は神崎郡船津村（通称御立）幸田氏邸内所在。

東向、高さ二二三・五・糢、正面幅三〇・六・糢、側面幅二五・五・糢。

材石は、花崗岩石質。台石高さ約四〇・糢。
正面及び右側面の碑銘下書は、

神崎郡船津村下垣内差三千四百九十二番地ノ二 大和来次氏。

石工は、

同郡田原村大字西田原（通称井口）一三二番地 中村文之介氏。

左側面の碑銘下書は、

同郡福崎村大字山崎八五四番地ノ一 大井進氏。

石工は、

同郡田原村大字西田原一三一一番地 中村良介氏、

建碑者は、

同郡中寺村大字溝口字西垣内六〇九番地 鎌谷木三次。

(写真と説明文 「播磨古文化財の実証的研究 鎌谷木三次著」
(同書の写真撮影日時不明)





「三上參次先生誕生の處」の碑

(右側面) 昭和 9 年 9 月 10 日建之
(正 面) 三上參次先生誕生之處
(左側面) 鎌谷木三次造之